



BSR 通信

BSR 推進室ニュースレター第 13 号

平成 27 年 4 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室
〒170-8470 東京都豊島区西巢鴨 3-20-1

03-5394-3079 (直通)

bsr_lab@mail.tais.ac.jp

目次

1 頁	：	巻頭言
2~3 頁	：	研究ノート
4 頁	：	さざえ堂だより・今後の予定
※BSR 図書室はお休みさせていただきます		

仏教と国際教養

大正大学仏教学部仏教学科

特任准教授 神達 知純

「仏教を信仰していますか？」

突然、そんな質問をされたら、誰だっけと知り込みしてしまうのではなかろうか。

実際に、ある調査によれば、何らかの宗教を信じていると答える人は 25% 程度に過ぎないのだという。仏教を信仰する人もそれほど多くないということになる。

しかしながら、日本に生きる私たちが仏教と全くかかわることなく生きていくことは不可能であろう。何しろ全国の寺院数はコンビニの数よりも多い訳だし、僧侶は 30 万人いるという話もある。1500 年という長い歴史もある。そのなかで仏教は日本人の感性を育み、日本人のこ

ろを形成してきたのだ。そのようなことに「気づく」ということは「信ずる」と同じように価値あることではなかろうか。

この 4 月、大正大学の仏教学科に国際教養コースが誕生し、私はその担当教員となった。「国際教養」は現在の大学の流行でもあり、その名を冠した学部や学科を多くの大学に見ることができる。しかし、国際教養が仏教学科にあるというのは特殊なケースだ。他の大学と同様に、大正大学の国際教養コースでは英会話を中心に徹底的な語学教育をおこなう。ただ、それとともに日本文化を学ぶことがこのコースの最大の特色である。日本人の衣・

食・住の文化、華道・茶道といった日本の伝統文化を体験的に学ぶのである。その学びを通じて学生たちは、日本文化の底流に仏教がしっかりと存在していることに「気づく」ことになるだろう。

今日の文化現象に仏教の痕跡が見えにくいから、なおさら、ユニークな試みになると考えている。語学力というスキルを身につけた学生たちは、将来、さまざまな形で世界の人びとと交流をもつであろう。

そのとき彼ら彼女らには、日本人のこのころをもって日本文化の魅力を伝えてほしい。そのために、私たち教員もしっかりと学生たちを指導していきたいと思っている。

研究ノート

シンポジウム参加報告

3月14日から18日にかけて仙台で国連防災世界会議が開かれました。

本体会議は仙台国際センターにて開催されましたが、防災・災害対応に関するパブリックフォーラムが仙台を中心に青森、岩手、宮城、福島各所で開かれました。パブリックフォーラムは、政府機関、地方自治体、NPO、NGO、大学、地域団体などが主体となり、シンポジウムやセミナー、展示等へのべ15万人以上が参加したと報告されています（公式ホームページより）。

BSR 推進室研究員もいくつかのフォーラムに参加しましたので、今号ではその報告をいたします。

支援者のメンタルケア

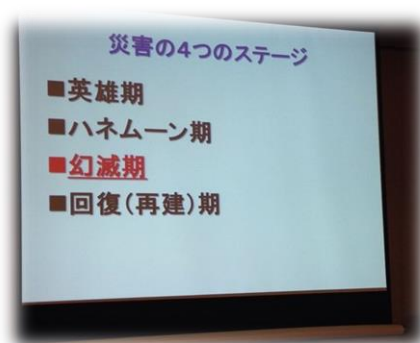
「災害対応時における支援者へのメンタルケアの必要性とその課題」（3月15日、TKPガーデンシティ仙台勾当台ホール2）では、災害時にヒューマンサービス（感情労働）をおこなう際の落とし穴である、バーンアウト（燃え尽き）をいかに防ぐかという問題について、帝京平成大学名誉

教授の中谷三保子氏が基調講演をおこないました。

災害時の人間の生きようとするエネルギーは支援者

をも巻き込むものであり、支援者が感情移入をしてしまうと、支援者自身も被災者となり、心身の疲弊をおこしてしまう。しかし、支援者は「自分は支援者である」という個人的・社会的立場を遵守しようとするゆえに、自分の弱さや疲弊に気付かず、最後は燃え尽きてしまうと中谷氏は指摘します。

災害には4つのステージがあります。まず、発災直後、非日常の状況のなかで、危険をかえりみず自身や家族を守るために行動をとるなど英雄的有能感を抱く「英雄期」、発災数週間から半年ほどの間が、生き残った人たちが連帯感や希望を抱き暖かなムードとなる「ハネムーン期」、発災数週間から数年がたち、我慢の限界、将来への悲嘆、連帯感の崩壊などトラブルも生まれてくる「幻滅期」、そして、生活のめどが立つようになり、地域が再建されていく「回復期」の4段階です。



バーンアウトとは、働く気力が出ず、少々休んでも体力が戻らなくなってしまう、極度の心身の疲労と感情の枯渇状態といえるもので、幻滅期に増加するといわれます。支援者のバーンアウトも、この幻滅期に、「感謝されない」、「やりがいがおきない」など疲弊感、虚脱感、無共感などが生じるも

の。これを防ぐには、できるだけ早い時期に心と体のリフレッシュをする必要があります。支援者をさらにケアする存在が重要ということでした。

基調講演のあと、実際に支援者のケアに従事しているお二方からの報告もありましたが、支援者団体のリーダー・管理職がこの問題を知り、ケアを実行する必要性や、仲間同士の人間関係も疲弊の一因になりうることなどが指摘されました。

東日本大震災では仏教者による支援活動も広くおこなわれましたが、支援が長期化しているなかで、支援する側のメンタルケアもますます重要になってくるでしょう。仏教者ならではのメンタルケア、セルフケアもありうるのではないかと思う一方で、「僧侶だから大丈夫」という過信がバーンアウトを招きかねないことも考えさせられました。

避難所としての寺院の有効性

3月16日は、AER TKP ガーデンシティ仙台ホールBにて、シンポジウム「防災と宗教～防災を宗教の視点から考える～」が開催されました。

被災地の宗教者の体験や活動についての報告、大阪大学准教授・稲場圭信氏による基調発題「災害における宗教者の可能性」、国内外の宗教者・ジャーナリストらによるパネルディスカッションという盛り沢山な内容です。本項では現地の宗教者の活動と稲場氏の発題を紹介しましょう。

宮城県栗原市の曹洞宗僧侶の金田諦応氏からは、「心の相談室」の紹介がなされました。宮城県内の



宗派・宗教を超えた宗教者が「心のケア（スピリチュアルケア・宗教的ケア）」を目指して集まったものが「心の相談室」です。



主な活動は、以下の 6 点。

- 1、身元不明者お弔い
- 2、電話相談
- 3、カフェデモンク実働隊
- 4、ラジオカフェデモンク企画・運営
- 5、シンポジウム企画開催
- 6、東北大学実践宗教学寄付講座運営・臨床宗教師研修企画・運営

本ニューズレター第 3 号の研究ノートで紹介した臨床宗教師は、「心の相談室」の超宗派・宗教の現場での実践活動が土台となっていることが分かります。

稲場氏は 2014 年におこなった「自治体と宗教施設との災害協定に関する調査」の報告をおこないました。1,916 の自治体にアンケートをおこなった結果、宗教施設と災害協定を締結している自治体は 95（399 施設）、協力関係をもっている自治体は 208（2,002 施設）という回答でした。399 件の自治体と宗教施設との協定の内容は、避難所としての使用が 385 件とそのほとんどを占めています（そのうち指定避難所は 272 施設）。そして、399 宗教施設の内

訳（不明分除く）は、寺院 189、新宗教 27、神社 26、キリスト教会 6 と、寺院の数が際立っています。おそらく協力関係にある 2,002 施設に占める寺院の割合もかなり高いものと推測されます。こうした協定・協力関係は、東日本大震災以降に増加している点も指摘され、被災地で実際に寺院が避難所として活用されたことの評価、それと同時に、あらかじめ協定がなく指定避難所となっていなかったがために、物資が届かない、連絡がとれないといった混乱が生じてしまったことへの反省が影響していることが見て取れます。災害時に、寺院が公共空間としての役割が求められる時、しっかりと応えられるだけの備えをしておくことも必要でしょう。

遺体処置の過酷さと尊厳

「東日本大震災の経験と教訓～災害時の弔いの尊厳を如何に保つか～」(3月17日、TKPガーデンシティ仙台勾当台ホール 6) では、遺体処置・処理がテーマでした。



おびただしい数の死者が出た宮城県では、遺体の処置は発災直後から喫緊の課題となります。県内の葬送業者の連合組織である宮城県葬祭業協同組合のもとには、3月11日の夕方に宮城県ならびに仙台市から

連絡があり、翌日朝 6 時に緊急対策会議が仙台市役所で開かれたとあります。基調講演をおこなった菅原裕典氏が社長をつとめる(株)明月記はその対策本部となり、以後、棺の組み立て、遺体の安置から、石巻での仮埋葬(土葬)・掘り返し・改葬にいたるまで、遺体処置の最前線に立つこととなります。

自治体との最初のやり取りが「棺をどれだけ用意できるか?」「1,000 本は大丈夫です」だったこと、多い時には 1 日 800 本の棺を組み立て、3月13日から31日までに6,510本の棺を県内22か所に納品をしたことなど、発災直後の緊迫した状況が伝わるエピソードが語られます。

そして、何より過酷と思えたのは、仮埋葬した遺体の掘り起し作業でした。県内では約2,100体を

仮埋葬しましたが、5月7日～8月中旬にかけて掘り起し、改葬を完了させます。その作業に従事したのは清月記の9名の社員だったのです。遺体はすでに腐敗が進んでおり、精神的にも、肉体的にも厳しい作業となります。しかし、従事者たちは一人一人の遺体を丁寧に掘り起し、棺に納めては手を合わせたといいます。極限の状況のなかでも、「ご遺体をきちんと送り出してあげたい」という思いに突き動かされていたという社員の言葉には、「弔い」ということの本質が込められているように感じました。(O)



さざえ堂だより

さざえ堂参拝の BGM のヒ・ミ・ツ

皆さん、お気づきでしょうか？ 今年の 1 月から鴨台さざえ堂内の、のぼり階段・最上階観音様の前・くだけり階段で、それぞれ違う BGM が流れるようになっていることを・・・。

以前は、『ヒーリングウォーター』という水音の音楽を全館に流していましたが、さざえ堂をお参りいただく行程のそれぞれで、様々なことを感じていただきながらお参りして欲しいという思いから、音響の回線を分けて三か所三様の音を聴いていただき、お参りしていただくことにしました。

この BGM をプロデュースしているのは、本学客員教授のレナス・ポブ先生です。レナス先生は、ベルギー生まれで、国営テレビなどのディレクター兼プロデューサーとして数々のドキュメンタリー、ニュース、ルポルタージュなどの制作に携わりました。1992 年に来日して以来、日本に魅せられ、都内に居を構えています。日本文化を深く愛し、日本的な繊細さと緻密さに母国ベルギーで培った技術とセンスでヨーロッパのエスプリあふれる大胆かつ斬新な作品を世に発表し続けている方です。

1 月から 3 月は、マレーシア人で、仏教経典を現代風の音楽にアレンジする Imee Ooi さんの『Prajna』（サンクリット版の般若心経）をベースに使い、海の音、エオリアン・ハーブを融合させ、癒しの空間を作り上げました。

また、この 4 月からは、さざえ堂のすぐ後ろにある 5 号館 1 階にあるアートギャラリー「エスパス KUU（空）」で開催されている林典子氏の写真展「アラ・カチュー キルギスの誘拐結婚」と、「仏教」の 2 つのイメージを重ね合わせた音が奏でられています。すなわち、Imee Ooi さんの『Usnisa Vijaya Dharani Sutra』という仏教の世界観からの音源から、のぼり階段（山脈が連なり、広大な自然をイメージした川の音と鳥のさえずり）、最上階（キルギスで親しまれている弦楽器のサウンド）、くだけり階段（大自然の中に祈りの気持ちが帰っていく）という特徴的な 3 つの音を取り出して、山と川に囲まれた高地で暮らす遊牧民の国であり、地理的にロシアの影響を受けつつもアジア的な香りを持つキルギスのイメージとの融合を図っているそうです。

「キルギスの誘拐結婚」写真展（6 月 24 日まで開催）と併せ、さざえ堂内の音・光・香り、そして全体から醸し出される雰囲気をご参拝の方、それぞれに感じていただければ幸いです。（M）

今後の予定

4 月 18 日（土）	11 時～12 時	花会式（天台宗）	鴨台観音堂前
	9 時～12 時	あさ市	南門 けやき広場
	13 時～15 時	僧話花	5 号館 1 階
5 月 16 日（土）	11 時～12 時	すがも鴨台花まつり	鴨台観音堂前
		※五宗派学生が合同で勤めます	
	9 時～12 時	あさ市	南門 けやき広場
	13 時～15 時	僧話花	5 号館 1 階

